

# 地域社会及び学校が、中学校体育教育に求めているものは何か —日米の中学校体育教育の比較を通して—

大阪府柏原市立堅下北中学校 教諭 宇都宮 勳

## (1) はじめに

私たち日本の体育教師は、日頃当たり前のように中学校で、集団訓練的要素の強い授業や、基礎体力向上や各種目の基本的技術の向上を目指した授業を行ってきた。しかし、アメリカの中学校での体育授業を参観したり、放課後のクラブ活動のあり方を調査する過程で、子供たちにとって最善の中学校体育授業とは何なのか。また、地域社会及び学校が中学校の体育教育に何を求めているのか。このことをあらためて見つめ直す良い機会だと考え、本研究を進めることにした。

## (2) 研究の概要

### 1. アメリカの中学校での教育システム全体をつかむ。

- アメリカの中学校では、日本のようなクラス制は全くとらず、各教科ごとに能力別に生徒たちが分かれて担当の先生の教室に各時間ごとに移動する。また諸連絡は、朝の校内放送で校長が行う。
- アメリカの教育現場では徹底した教育の分業化が進んでおり、その実態を知る。(例えば、アメリカでは生活指導は校長や副校長が行う。また、問題行動等が起きた場合にはスクールカウンセラーやスクールポリスが対処する。)〈アメリカの中学校には、スクールカウンセラーやスクールポリスが常駐しているので、一般の教師は各教科の教材研究や教科指導に集中できる。〉
- アメリカの中学校では懲罰制が明確化されているので、教師が大声を張り上げたり、怒らなくても直ぐに静かになる。

### 2. アメリカの中学校での体育科授業を参観する。

日本のように、多分に集団訓練的要素を含んだ授業を実施することはほとんどなく、生涯教育の導入的ならえ方で、リフレッシュして楽しむための教科として位置づけられていた。

### 3. アメリカの中学校体育教師にインタビューして放課後のクラブ活動のあり方などを調査した。

日本のように学校教育の一環としてのクラブ活動ではなく、学校施設を利用した一般の社会体育の活動であり、指導者としてその活動に参加して収入を得る教師もいれば、参加しないで早く帰宅する教師もいる。(長期休暇期間中も同様である。ただし、日本のように給与は支給されない。)

### 4. アメリカ人の「躰」に対する概念と、アメリカでの「躰」の方法を知る。

- アメリカでは「躰」は家庭内で行うものであり、それができない家庭が多いからといって、学校教育に「躰」を望んだりしない。学校は、あくまでも「知識を修得する場」として捉えられている。
- アメリカでは、「躰」の方法として、「アメと鞭」の理論を重要視しており、親の言いつけに背いた時には外出を禁止されたり、物を取り上げられることもしばしばあるようだ。

### 5. 地域社会に開かれたアメリカの学校の実態を知る。

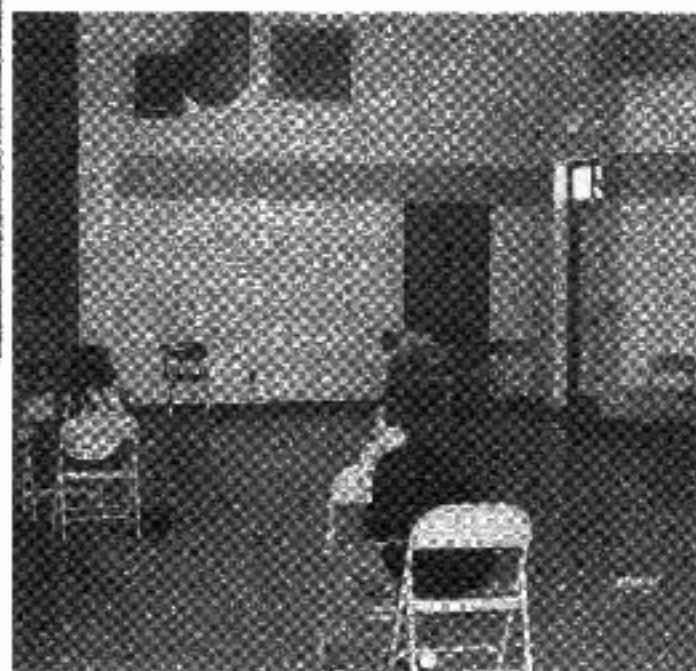
- アメリカの学校では、学校関係の情報は広く地域社会に公開されており、インターネットを利用して検索することが可能である。
- また、アメリカでは地域住民が奉仕活動の一環として学校教育活動に参加・協力することが日本よりも遙かに多い。しかも、学校側もそれを歓迎している。まさに、地域社会と学校が一体となって子供たちを育てようとしている。(アメリカでは学校はあくまでも「知識を修得する場」として捉えられているので、学校がその仕事に専念できるように、地域住民やスクールカウンセラー・スクールポリスが学校をバックアップしているというのが実態のようだ。)

6. 現地調査の日程

日 時	場 所	内 容	関係者・関係機関 資料（写真等）
3/27 (月) 8:00	Topsail Middle School	校長先生やマイルズ先生からアメリカの中学校での教育システム全体を教えていただき、その後各授業を参観。（特に体育の授業を重点的に参観した。）	Topsail Middle School 17385 US HWY 17 Hampstead NC 28443 Tel (910) 799-3768 写真①参照
15:30 17:00	図書室 Topsail Elementary School	歓迎会をしていただき自己紹介等を行う。 小学校の図書室で小・中合同の職員研修会が行われ、我々も一緒に参加する。	
3/28 (火) 8:00	Topsail Middle School	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前日に続いて各授業を参観させてもらう。（途中、避難訓練に遭遇した。）</li> <li>・廊下の至る所に肯定的評価につながる掲示物があった。</li> <li>・食堂で生徒と一緒に昼食をとる。（食堂の隣で、懲罰を受けている生徒たちが数名いた。）</li> </ul>	写真②参照
13:00	Topsail Elementary School	<ul style="list-style-type: none"> <li>・午後から隣りの高校を訪問する。（もちろん授業も参観。）</li> </ul>	
16:00	中学校の図書 室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校の校内研修に参加する。その際、井原先生がビデオテープを使用して日本の中学校を紹介する。</li> </ul>	



写真① 〈歓迎の立て看板を囲んで〉  
(Topsail Middle School)

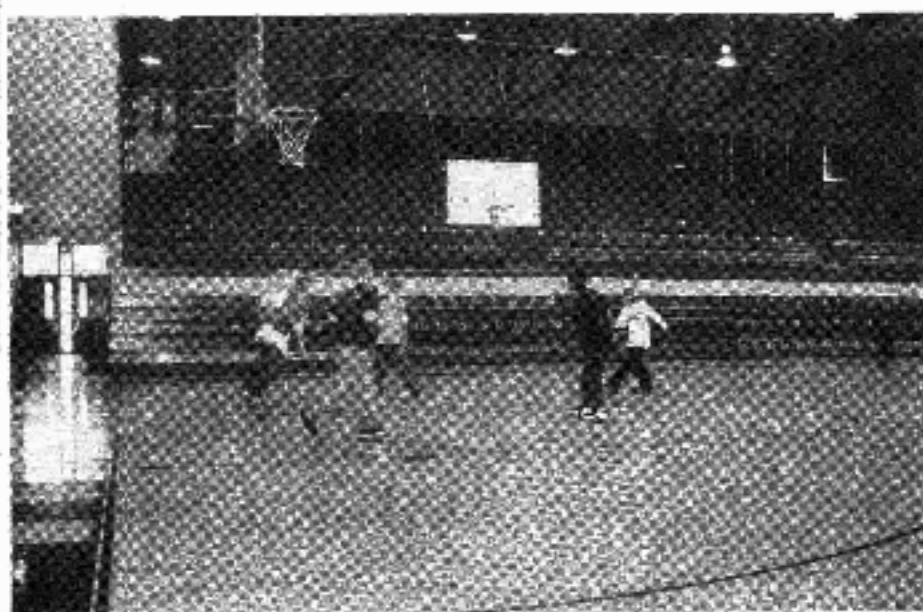


写真② 〈懲罰を受けている生徒〉  
(Topsail Middle School)

日 時	場 所	内 容	関係者・関係機関 資料（写真等）
3/29 (水) 8:00 12:00 13:30	Topsail Middle School  Restaurant	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習を伴う教科を中心に授業を参観する。 (もう一度体育の授業を参観。)</li> <li>・昼食時に郡の教育委員会の方々と懇談会を行う。</li> <li>・午後から、移民者で英会話が困難な人達を対象にした学校を訪問する。</li> </ul>	写真③参照
3/30 (木) 8:30  19:00	Noble Middle School  Wise House	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体育の授業を中心に参観させてもらう。 授業後に体育科教師3人に、放課後のクラブ活動についてインタビューをする。 (懲罰制が確立できているので教師が大声を出さなくても、教師の合図で簡単に静かになる。)</li> <li>・同校の食堂で生徒達と一緒に昼食をとる。 (隣の懲罰室で数人の生徒が、先生と一緒に食事をしている。)</li> <li>・ウィルミントン大学の迎賓館で歓迎会をして頂き、地元の教育関係者の方々と夕食を共にする。</li> </ul>	
3/31 (金) 9:00 11:00 14:00	Williston Middle School  Hollytree Elementary School  ニュー、ハノー バー High School	<ul style="list-style-type: none"> <li>・元は黒人だけの学校を訪問した。 現在は黒人と白人が混ざっている。 (体育の授業を中心に見学する。)</li> <li>・初めて小学校の授業を参観する。 (先生専用のラウンジでゆっくりと昼食をとる。)</li> <li>・この日は、UNCW地区を訪問した。 先生方全員で一日中行動を共にする。</li> </ul>	写真④参照

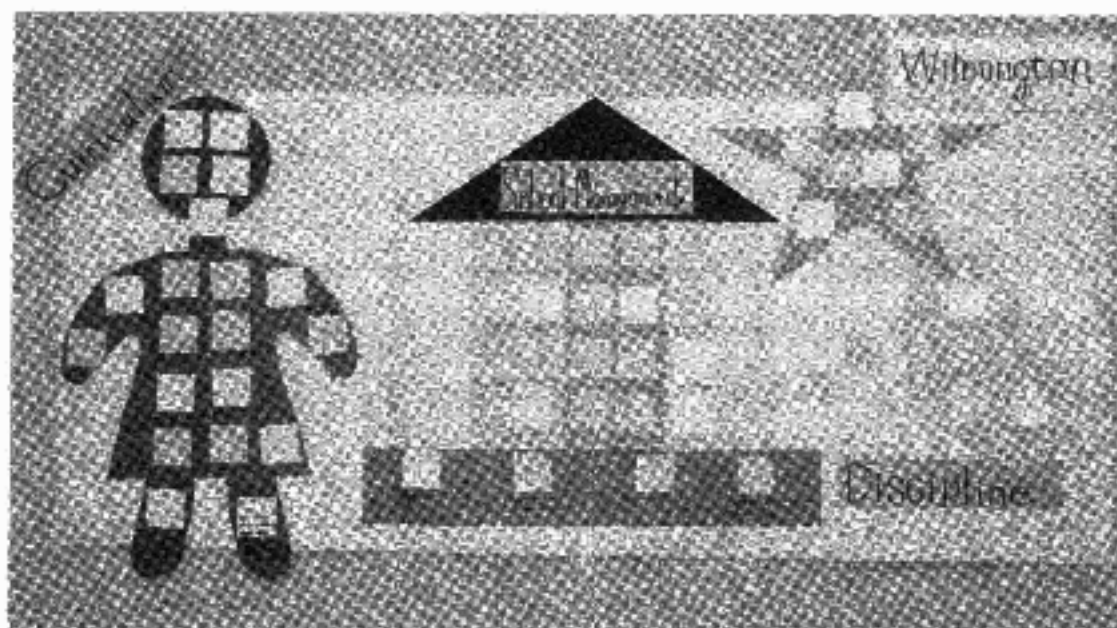


写真③ 〈体育の授業風景：フリスビーのアップ〉  
(Topsail Middle School)



写真④ 〈体育の授業風景：バスケットボールのゲーム〉  
(Williston Middle School)

日 時	場 所	内 容	関係者・関係機関 資料（写真等）
4 / 3 (月) 9 : 00	Exploris Middle School	・今回のプロジェクトに参加した先生方全員で私立の博物館立の中学校（チャータースクール）を訪問。（いわゆる実験校で、この学校にはスクールポリスもないし、先生の内半数近くは教員資格を修得していない。しかし、教職員の数は他校よりかなり多い。）	
13 : 00	教育委員会 事務局	・教育委員会事務局の会議室で、教育長の挨拶及び州の教育方針などの説明を聞く。	
4 / 4 (火) 9 : 00	Exploris 博物館内の 大ホール	・サマリーコンファレンスを行う。 日本から来た3つのグループ（大阪・広島・鳴門）が、今回のプロジェクトで学んだことを各グループごとにまとめて発表。	写真⑤参照
12 : 00		・同ホールにて、アメリカの教育関係者の方と昼食をとりながら意見交流する。	写真⑥参照



写真⑤ 〈サマリーコンファレンスで使用したUNCW地区のまとめ〉  
(Exploris博物館内の大ホール)



写真⑥ 〈サマリーコンファレンスを終えて、  
UNCW地区全員で記念撮影〉  
(Exploris博物館内の大ホール)

### (3) 研究の結果と考察

アメリカでは、「躰」は家庭内で親が責任を持って行うべき事柄とされているので、学校がそれを肩代わりする必要がない。さらに、「躰」が不十分で他人に迷惑をかけた、集団の秩序を乱すような生徒がでてきた場合の懲罰制が確立されているので、学校内では各教師は各教科本来の目的を達成するだけで良い。しかし、日本では戦後年を追うごとに家庭や地域社会の教育力が低下し続けているにもかかわらず、義務教育期間中の生徒には懲罰制度も全く無く、社会全体が色々なことを学校教育に頼ってきたため、各教科（特に体育教育）においては本来の教科内容以外のことがらも教える必要がなくなってきた。従って、学校内の雑務は増える一方である。私の知る限りでは、地域社会及び学校が中学校の体育教育に求めているのは、現時点では「楽しく運動させる」こと以上に、「集団訓練」や「躰」及び「基礎体力の向上」といったことがらだと考える。

しかし、ここで考えなければならないのは、どちらの国の実態が良いのかというのではなく、本来どうあるべきかということである。最も望ましいのは、家庭や地域社会の教育力が向上し、義務教育期間中の生徒に対する懲罰制度が不必要となった上で、「楽しく運動させ健康な体をつくる」といったことを中心に据えた

授業が一日も早くできるようになることである。

### (4) 今後の展望

私の希望とは逆行し、今後日本では家庭や地域社会の教育力がますます低下し、「躰」などを体育科を中心とした学校教育で底支えしなければ、若年層の道徳意識や社会秩序はますます乱れるのではないだろうか。

しかし、学校側が「開かれた学校」を目指し、家庭や地域社会が学校と連携し、両者が一体となって子供たちにかかわっていくことができれば、きっと理想の教育が実現できるであろう。

### (5) おわりに

一刻も早く、日本の社会全体が「躰」や道徳教育の重要性を再認識し、子供たちの教育を学校にのみ頼るのではなく、家庭や地域社会の教育力向上に努めるようになって欲しい。そうすれば、「開かれた学校」を目指す学校と、教育力向上を目指す家庭や地域社会が、連携し合い、一体となって子供たちにかかわることが可能となる。

このような環境が整った上で、「楽しく運動させ健康な体をつくる」ということを中心に据えた授業を、一日も早くこの日本で実現できるようになることを私は切望する。

## グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト 米国現地研修ジャーナル（2000年3月25日－4月5日）

元 大阪教育大学教育学部附属平野中学校 教諭 岡本圭司

### 3月25日（土）

デトロイト経由でローリーに到着。車でウィルミントンに移動。途中、スーパーマーケットに寄る。すでに夜11時を過ぎており、店内にはお客さんはほとんどいない。生鮮食品売場にも圧倒されんばかりの種類と量の商品（おそらく翌日のお客さんを見込んでいるのだろう）が陳列され、アメリカの経済発展、商業主義・大量消費社会の現状を見る。ほとんどすべての食品には栄養成分表示が義務づけられているようである。消費者の関心も高いのであろう。

### 3月26日（日）

午前、コーストライン・イン（宿泊先）付近を散策。このアメリカ大西洋岸の小地方都市には湾岸警備隊の監視艦、第二次世界大戦で活躍した軍艦ノースキャロライナ（現在は博物館である）が見られる。日曜日の朝、住民は家で寛ぐか、または教会に行っているのか、町の中心部でも人をあまり見かけない。

かなり大きな教会の牧師が聖書を読みながら、信仰を説いている様子をいくつかのテレビ局が放映している。アフリカ系アメリカ人の牧師 (Dr. Crefor Dallor) のこの教会では信者はすべてアフリカ系アメリカ人である。「神は常にあなたたちのそばにいる。仲間意識・連帯感 (fellowship) が大切である。」とこの牧師は説いている。信者はスーツやドレスで正装し、熱心にメモをとる。ヨーロッパ系アメリカ人の牧師 (Joyce Meyer) の教会には少数のアフリカ系アメリカ人、他のエスニックマイノリティの姿が見られる。どちらの教会にも家族連れもいる。キリスト教（もちろん他の宗教も存在しているはずだが）が人々の生活を支えていること、人々の考えに影響を与えていることを実感する。

午後、ウォーカー先生の車で町の様子を見学。中心部には古い建築物、教会がたくさん見られる。お店にはお客さんの姿も見られる。アメリカ大都市の摩天楼や喧噪とした雰囲気はない。この町周辺は「つつじ」で有名であり、綺麗に花を咲かせている。数週間後には「アゼリア・フェスティバル」が開催される。今日

の気温は大阪の五月上旬と同じくらいである。

中心部を離れると基本的にお店は大通りの車の交通量が多い所に集中する。どのお店にも大きなスペースの駐車場がある。住宅街にはそれらはほとんど見られない。かなり大きな家が並ぶ住宅街には庭に大きな高い木がたくさんあり、自然を利用する形で宅地開発されたようだ。ここには小さくて、古くなった家は見られない。町角には不動産を斡旋する業者が情報紙を入れた小型のケースを置き、たくさんの物件を紹介する。この東部沿岸地帯は人口増加率が高い地域のひとつである。

住民は家族構成や収入に応じて、新しいまたは別の家を購入し移り住む。自分で家を建てる人もいる。アフリカ系アメリカ人が集中的に多く住む住宅街も見られる。家々はやはり前述のものと異なり、概して、古く小さい。日曜日の午後、彼らは家々の前庭に集まり、話を楽しんでいる。職場や学校を除いて、地域では人種間の交流が限られているように感じる。

あるテレビ番組では町の情報のみを伝える。例えば図書館や博物館で行われる催しの紹介、求人情報などを音声なしで繰り返し流す。指名手配中の容疑者の詳細な情報（名前、顔写真、人種、身長、体重、髪色、眼色、性別、容疑内容）を伝え、住民に警戒、協力を求める番組もある。天気予報専門の番組もあり、ストームや竜巻などの危険情報を知らせる。地方テレビ局が住民に必要な様々な情報を提供する。

### 3月27日（月）・28日（火）・29日（水）

トップセイル中学校訪問。学校長とコミュニケーション科（日本での国語科）の先生が昨年6月に日本の学校を訪問している。学校はウィルミントン市の北、ペンダー郡に位置している。敷地はたいへん広く、回りを囲むフェンス等はない。校舎は一階建てでとても新しい。玄関を入ると、生徒に呼びかけるたくさんの色鮮やかなポスター類が目につく。壁の掲示物には生徒の作品が飾られ、多彩である。この学校にはテレビで以前見たような玄関で持ち物検査をする光景はない。

そのような状況ではないことが後ほど生徒の様子を見れば理解できる。

8:20のベルで生徒は1時間目の教室に入る。それまでは校舎の外でバスケットボールなどをして友達と遊んで過ごす。ソーシャルタイムと呼ばれる。8:25に校長が放送であいさつと連絡をする。また、生徒と教職員が教室に掲げてある星条旗に向かい、胸に手を当てて国家に忠誠を誓う。

この地域では中学校教育は6・7・8年の3学年制である。教室群は学年別に分かれており、その学年の授業を担当する先生が所有する教室が並んでいる。中庭があり、保護者がボランティアで植物を植え整備したとのことである。

いくつかの授業を見学する。授業はコア教科(数学・コミュニケーション・理科・社会など)が90分授業で、二教科の学習を必要に応じて時間配分を実施している。ウイール教科(音楽・美術・体育・技術など)は45分授業である。3段階の学力別編成授業を行い、保護者もこの制度を支持している。どの授業でも学習内容の定着のために宿題が出される。生徒は教科書を学校に置いておき、宿題がほとんど出ないというのはここでは昔のことである。教室にはそれぞれの先生は生徒が守るべき授業でのきまりや期待、学習意欲を持たせるメッセージを示している。生徒数は20数名である。通常の授業は驚くほどに静かな、ざわざわしない落ち着いた学習環境で行われている。生徒は基本的に一人ひとりが教科書やワークシートの学習課題に取り組む。私語はなく、黙々と取り組む様子が印象に残る。もちろん学習に集中できない生徒は校長などのカウンセリングや注意を受けることとなる。先生もどのような状況でも感情的に叱ることはない。すこし、ざわつくと先生は「静かにしなさい。」とは言わず、「シュー」と言う。生徒の中には同じようにして静かにさせる生徒がいる。先生はていねいに指示を出し、そのことを守

る責任を生徒に要求する。姿勢の悪い生徒には学習に悪影響がないかぎり注意しない。そのように姿勢が悪く、関心を示していないように見える生徒も先生が問題の解答を聞くと進んで挙手をする。姿勢と学習への関心は関連が薄いとも見受けられる。意見を発表し合う授業では一人ひとりの意見を聞いていると、先生は授業を進められないのではと思うほど、多くの生徒が挙手をして発表の意思表示をする。だから、授業は実質的にインタラクティブである。数学の授業では教育実習の大学生がいる。黒板よりOHPを使う先生が非常に多い。

平均以上の学力を持つ生徒対象の理科授業では3・4人のグループ単位で実験・観察を行う学習をしている。それぞれのテーブルに実験・観察の課題や方法が提示してあり、実験道具類が置かれている。生徒は一つの課題が終わると、次のテーブルに移る。子どもたちの関心は高く、意見を出し合い真剣に取り組む、さわがしくない。インターネットで必要な情報を集める生徒、理科の本を窓際で読む生徒もいる。先生はそれぞれのテーブルを回り、生徒の学習を指導する。このような授業は月に一度ほど行われる。生徒が同時に別々の実験や観察に取り組むことは日本の理科の授業ではあまり見られないのではと思う。

別の低学力生の理科授業ではグループ単位で人間の体の組織や働きを教科書で読み、模造紙に体の組織図を描いてまとめる活動をしている。学習意欲は高いと見られるが、他の授業に比べ、話し声も大きく騒がしい中で活動する。あるグループでは腎臓をかなり上の位置に描いていたので、「このあたりには胃があるんだよ。もっと下のほうだよ。調べてごらん。」と言っておいた。この学習の目標は生徒に配布されたグループプロジェクトの指示を見れば分かるので、以下に示す。

#### グループプロジェクト：体のしくみ

- 1 それぞれの班が割り当てられた体の部分のしくみについて本を読み、調べる。
- 2 クラスでの発表方法を決める。例として、詩、劇、宣伝、続き漫画、なぞなぞ、迷路、動く彫刻、ゲーム、透かし絵、模型、クロスワードパズル、ロールプレイ、コラージュ、図表、ラップ音楽、パンフレット、スキットなど。
- 3 模造紙に班の一人の体の輪郭を書く。割り当てられた体の器官の図を描く。器官を分類し、名づける。

- 4 クラスで班ごとの器官図と学習内容を発表する。班のみんなが発表に参加する。
- 5 一人ひとりが毎時間の授業から学んだことを五つ記録する。

評価規定	各25点
器官図は完全で適切であった	( )
班のみんなが参加した	( )
発表を十分に準備し、明瞭に行った	( )
重要な内容を教えた	( )
班が協力し、課題に取り組んだ	( )

#### 成功のための計画

- 1 「総合科学」と「人体」の両方の教科書を読む。
- 2 理科のバインダーにノートのコピーを二枚ずつ保管する。
- 3 得意・不得意に基づいて班のメンバーと責任分担を分け合う。
- 4 活動プランをみんなで作成する。
- 5 課題プリントを保管する。先生はみんなの評価を後に使用する。

体の輪郭を描くために教室の端に呼ぶまで、班の活動をしなさい。

このように活動での指示はかなり細かいものである。

7年生のコミュニケーション授業では英語の文型を学習している。I got tired. のgot は linking verb であるとか、We play tennis. の play は action verb であるとか、名詞や動詞を修飾する形容詞や副詞が文のどの位置に入るのかを黒板や宿題となっていたワークシートを使って学習する。生徒はよく発言する。毎日、使っている英語の文型でもときどき間違える生徒がいるのは日本と同じであり、基本文法をきちんと教えている。生徒のワークシートには複合主部、複合述部、直接目的語、前置詞句、同格名詞のような文法専門語が使用される。

別のコミュニケーション授業では中国と台湾に関する小説を読んでいる。ワークシートに書かれたキーワードをインターネットを使い、調べる。最後には中国と台湾との違いを作文に書く課題がある。このように情報を入手するためにインターネットは頻繁に利用されている。

地理の授業では個々に東アジアと東南アジアの国、首都、海洋、河川などを白地図に書き入れる学習をし

ている。基本的に教科書などを読み、自己学習する方法である。

美術の授業では先生が物語を読む。すべての子どもが心に「魔法」を持っているという内容である。それを聞きながら、一人ひとりが自分の持つ「魔法」はどんなものか考え、それを入れる「箱」と魔法を使うときの「スティック」を作っている。中には関心なさそうな生徒、立ち歩く生徒、先生の読む物語を聞いていないような生徒がいる。物語を読み進むことで生徒の関心を引き出そうとしているのか先生は学習態度の悪い生徒には一切注意をしない。一定の時間、物語を読むと先生は質問をする。これにはたくさんの生徒が発言し、私はびっくりする。ある生徒にどのような「魔法」を持っているのか聞いてみると「友達と仲よくなれる魔法」と答えてくれる。

選択音楽の授業では吹奏楽のバンド練習を行う。中学校レベルでも多くの学校にはバンド練習がある。それぞれのパートに責任を持って、全体で一つの音楽を創りあげることで力を合わせることの大切さを学んでいるように感じる。先生主導の授業で生徒一人ひとりがかなり真剣に取り組む。壁には「学習過程を大切に



しよう」「目標を高く持とう」というスローガンがある。

月に一度行う火災訓練が授業途中にあった。生徒はとて静かに整然と廊下を横切り、別の教室を通過して、校舎横の空地に避難し、待機する。人数確認はしない。5分後に校舎の安全が確保されたというアナウンスが流れ、教室に戻り授業が再開される。日本の学校の火災訓練のような校長からの講評はない。

昼食はカフェテリアで食べる。セルフサービスで自分の好きなものを注文し、お金を払う。テーブルでは男女別で座っている。授業とは異なり、かなり賑やかで楽しそうな顔がたくさん見える。また、カフェテリアのテーブルの無いところに数人の生徒が背を向けて座っている。この生徒たちは午前の授業で態度がよくなかったため、罰として座らされている。昼食時刻がみんなより遅くなる。中に一人、全く反省していない生徒がいて、落ち着きがなく椅子から転げ落ち、みんなに笑われている。この生徒たちに意見を聞きたかったが、罰を受けている時なので聞けない。

ジャパンクラブと名づけられた日本の文化を学ぶ課外活動がある。担当は昨年日本を訪問した先生で、関心のある生徒が集まる。廊下にも日本を紹介する本、物品、カタカナで書いたクラブ生の名前を展示する。私の学校の生徒と電子メール交流をさせたいと考える。

毎日、15分間であるが学年の先生が話し合う team time がある。8年生の先生はお菓子を食べながら、褒美の遠足の話をする。放課後の校内研修に参加する。みんな熱心である。放課後になれば先生も生徒と同じようにすぐに学校を出るということもここでは見られない。学年・学校の教職員は実に仲がよさそうである。

初日の放課後に催された歓迎会にはこの学校の教職員だけでなく、郡の教育関係者も出席され、温かく迎えていただく。そこには町の新聞の記者も来ており、インタビューを受ける。翌日、私たちの訪問の様子が新聞に掲載される。しかし、残念なことに私の話とは違う内容になっている部分があった。

アメリカでは町ごとに新聞があると言える。このような新聞で住民は本当に細かいいろんな情報を得ている。住民同士を繋ぐ働きをする。情報を共有すること

が大切であると住民も新聞社も感じているのであろう。

学校のある地域はエビ漁・エビ養殖産業が盛んである。近年は大企業が進出してきており、個人漁師は漁獲量が減っている。自然環境、特に台風に影響を受けやすく、生徒家庭の経済状況にも影響する。自然災害後には復旧のために建築関係の仕事を求めて人々が流入し、生徒数に変化が出る。この郡では近年、農場で働くメキシコ人家庭の子どもが増えている。

### 3月30日（木）

ノーブル中学校を訪問。ウィルミントン市中心街に近い。図書館はメディアルームと呼ばれ、インターネットに接続されたコンピュータが十数台設置されている。生徒は授業中においても情報収集のためにこの部屋を訪れる。司書のボランティアもあり、生徒のニーズに応える。

コミュニケーション（国語）の授業を観察する。生徒数20名。Amistad（アミスタッド）の本を使っての授業。1839年にアフリカからキューバに向かう奴隷船に乗せられたアフリカ人が乗組員を抹殺し、沿岸警備隊に取り押さえられ投獄され、彼らを救うために元大統領や弁護士が立ち上がる真実が書かれている。このように教材は先生が自由に選ぶことができる。先生の質問に対する生徒の意見発表が中心で、かなりインタラクティブな学習である。クラスのほとんど全員が発言する。先生に授業の終わりに「日本の差別」について話してくれと頼まれ、同和地区出身者、在日朝鮮・韓国人、先住民族（アイヌ人）に対する差別について話をする。生徒は熱心に聞いてくれる。

別のコミュニケーションの授業ではコンピュータを使って詩を作っている。俳句も作る。俳句の基本的な知識を学習し、生徒は自由に活動する。俳句はアメリカの学校の詩の学習に多く取り入れられる。私たちが日本から来ていると知ると、たくさんの生徒が自分の名前を日本語で書いてほしいと頼む。漢字、ひらがな、カタカナの説明に興味深く聞き、未知の文字に関心を示す。

この学校にいる実習生は3～4カ月実習する。日本では長くても1カ月だと知ると、日本に行きたいと言っていた。警官が常駐し、生徒とのコミュニケーションが多い。問題に対処するだけでなく、カウンセリング

や麻薬犯罪を防ぐための教育も行う。授業で問題を起こした生徒のためのインスクールサスペンション（校内停学）という罰則制度があり、他の生徒との接触を禁止された状況で、校内にて特別授業を受ける。学期制は二種類あり、夏休みを2カ月以上とる一般的なものと9週間ごとに一定期間の休みをとるものがある。生徒（家庭）の希望でクラス編成をし、先生もそれぞれの担当が分かれる。

ベンダーラーニングセンター（オルタナティブスクール）を訪問。低学力生・問題行動のある生徒・ESL生徒、6～12年生71人が学ぶ。生徒は一定期間内に成果を出す責任を負っている。もちろん先生にもそのための責任がある。校舎は普通の学校に比べると小さく、立派ではなく、グラウンド、体育館の施設はない。コミュニケーションの授業では詩を作っている。自己表現の手段として、詩を取り入れることはいろんな学校で実践しているようである。

この学校の使命は通常の学校や職場で良い成果をあげるために必要な重要なスキルを身に付けるよう、生徒を助けることである。コンピュータを実際に組み立てる授業、リーディング・数学の授業、薬物・アルコール対策、生徒間対立の解決対策などが特徴である。

### 3月31日（金）

ウィルストン中学校を訪問。ESL授業を見学（詳細は研究報告書参照）。

ハノーバー高校を訪問。町の中心部にあり校舎はかなり古い。銃持ち込み禁止の標識がある。小・中学校での色鮮やかな掲示物がなく、かなり雰囲気異なる。コミュニケーションの授業を見学。映画にもなったDead Poets Societyを読んでいる。先生は本を置くために譜面台を使う。高校生も授業に積極的である。授業の最後には先生と生徒が輪になって、小さなぬいぐるみを受け取った生徒がテーマにそって話をする活動をたのしく行う。これも少人数での行き届いた授業だから可能なのであろう。木工技術の授業では家具を作ったり、簡単な家を建てる。これらは災害で家を失った人のために市が買い上げる。教室には本格的な機械、道具が並ぶ。普通科高校である。

ホーリートップ小学校を訪問。副校長先生は若く、30代後半に見える。図書館（メディアセンター）が明るく、児童が楽しく読書できる環境である。この学校でもAccelerated Reading（促進読書）プログラムに基づいて、児童に読書指導を行っている。このプログラムは本を読むごとにポイントが児童生徒に与えられ、表彰されるものである。本の内容を理解しているかどうかはコンピュータで確認する。このプログラムについて、ある大学教授は児童生徒は互いに競争し、コンピュータでの内容理解確認が心を育てる読書を企ててしまうものだと問題点を指摘する。小学校でもコンピュータ教育は盛んで、立派な設備が揃っている。低学年の教室では4人ずつのグループで学習している。

この学校で初めて、大声で厳しく指導する先生を見る。その先生の児童が列に並んで教室移動するとき、数人の児童がしゃべっていた。即座に全員を静止し、かなり厳しく指導する。小学校を主に訪問した先生は児童に「日本ではあなたはどのように指導するのか。」とよく聞かれたと言う。集団行動上の規律については低学年時より、厳しく指導しているようだ。

### 4月1日（土）

トップセイル中学校のカウンセラーであるパットさん夫妻が車で地域を案内してくれる。町の中心部を離れ、自然の森・川・湖をそのままに保護している自然公園に行く。大都市にはないゆったりとした時間が流れる。大西洋に面したレストランで彼女の息子夫妻と五人で昼食。魚料理がなかなかおいしい。客は食べ切れなかった料理を箱に入れて持って帰る。これは良い習慣である。泳ぐには季節が早く、サーフィンをする若者がいるだけ。夏になれば、長期滞在者で人口は膨れ上がるそうだ。夏にもう一度来ればいいが。午後には昔のプランテーション所有者の屋敷跡で開かれている手作り商品を売るマーケットに行く。花の苗もたくさんあり、日本の花市のような感じでもある。彼女の家は夫の手作りで3階建てであり、1階部分は洪水対策で高床式になっている。台風はかなりの恐怖である。ニューヨークからフロリダまで続く水路に面しており、普段はのどかな風景がある。外出する時も玄関の鍵は閉めない。アメリカではかなり安全な地域なのであろう。望遠鏡で野鳥を見ながら、のんびりする。夜には友達がやって来て、にぎやかに食事をする。毎

週やっているようだ。みんなが冷蔵庫から自由に飲み物を取ってくる。日本では他人の家の冷蔵庫はなかなか開けないがここではごく普通のことである。日本の味噌汁・お茶漬（インスタントではあるが）は好評である。お米も主食ではないがサイドディッシュとして食べている。

#### 4月2日（日）

朝もゆったりと野鳥を見る。ハチドリもいるようだ。昨日からサマータイムになっており、自分の時計を合わせていないのも忘れて、のんびり過ごす。しかし、こちらでは当たり前のことなのだろう。うらやましい限りである。

#### 4月3日（月）

イクスプロリス中学校訪問。博物館付属の非営利チャータースクールである。学校の目標は新しい教育を研究・実験する・他の学校の先生に広め、成果を共有するであろう。大学とは繋がっていない。教育の特徴としては年度当初に一人ひとりの生徒が自分に関する10の課題、世界に関する10の課題を設定し、一年間にそれらの学習に取り組む。個々の取り組みを自己評価する。学期ごとの懇談では生徒自身が保護者や先生に自分の学習過程をまとめたポートフォリオを用い、学習内容を発表する。

数学の授業を観察。生徒がグループ学習をする。ウィルミントン地区の学校に比べ、生徒の自発的学習を重んじているようだ。生徒の話し声が大きく、集中度も個々に異なる。

スペイン語の授業ではみんなで歌を歌う。先生は最初の二年間は文法を教えず、スピーキング・リスニングを教えると言う。他には3時間目以降の授業内容を先生と生徒が話し合いをして、決定する取り組みがある。

午後、州教育庁を訪問する。州の教育改革の説明を受ける。この改革が州をあげての抜本的改革であることを実感する。彼らのリーダーシップは高く、子どもたちの学力向上やより良き市民となるための教育には

あらゆる対策をも講じる意気込みも感じる。各教育関係者や保護者を支援するため、専用のホームページを開設し、教育改革の広報を行い、また、はば広くみんなから意見を求める努力をしている。この州の教職員が日本の教育を学ぼうと来日していることもこの改革に大きな影響を与えるであろう。

#### 4月4日（火）

イクスプロリス博物館の Zanzibar Room にてサマリーミーティング。それぞれの派遣地区グループが学校訪問での観察した事柄、学んだ事柄を発表する。

イクスプロリス中学校の生徒がサウジアラビアの社会・文化を研究し発表する。外国の社会を学習する中で、自分たちの住むアメリカ社会をも学習している。

Multidimensional Citizenship : Educational Policy for the Twenty-first Century（多次元市民性：21世紀への教育方針）と名づけられた報告書にはこれからの25年間、私たちが生活を営む上で必要な市民性を八つ挙げている。

- \* 地球社会の一員として、諸問題を捉え解決に取り組む力量
- \* 他と協働し、社会での自分の役割・義務に責任を持つ力量
- \* 文化的な違いを理解し、受入れる力量
- \* 批評的、全体的に思考する力量
- \* 非暴力で対立を解決する積極的な意思
- \* 環境を守るために生活様式や消費習慣を変える積極的な意思
- \* 人権について高い意識を持ち、それを守る力量
- \* 地域、国内、国際間の政治に参加する積極的な意思と力量

これらの意思・力量を持ち備えた地球市民を育てるために「教育」の果たす役割は重大である。そのために各国の教育関係者が互いの教育を見聞し、意見交流することが不可欠である。この報告書をじっくりと読み、外国の教育関係者との交流を続けていきたい。

## A アメリカにおける第二言語としての英語教育の実際を観察する 観察内容を参考に日常の英語授業の改善点を探り、研究実践する

## B アメリカ社会での学校教育の実状と果たす役割・家庭教育のそれらについて見聞する

元 大阪教育大学教育学部附属平野中学校 教諭 岡本圭司

### (1) はじめに

A 2002年度から実施される新学習指導要領では外国語（英語）科の目標は「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」と定められている。

この目標にある「実践的コミュニケーション能力」とは、外国語の文法規則や語彙などについての知識を持っているだけでなく、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる能力である。

教育現場ではALTの先生が登場して十数年が経ち、学習内容・形態の改善とともに生徒の他文化理解も進み、コミュニケーション能力も少しずつ伸ばしてきていると言える。

しかし、特に「聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」ためには日本の英語教育の質的变化が求められていることは明らかである。

そこで、多民族国家アメリカにおける第二言語としての英語教育の実際を観察し、日常の英語教育の改善すべき点を探り、研究実践をしようとする。

B 日本の学校は子どもたちに対するさまざまな教育に担おうと努力を続け、一定の成果をあげている。しかし、子どもたちの生活状況が大いに変化している現在において、今までの一斉教育・画一的教育、管理的教育、知識偏重教育の限界が見えている。そのような中、子どもたちは直面する問題を自らの力で解決することができず、イジメ・不登校・反社会的行動などの問題を引き起こしている。

これらの諸問題を解決するためには学校が家庭や地域社会とともに力を合わせ、子どもたちの教育に携わることが不可欠である。そこで、これからの学校教育

の使命と家庭や地域社会との協力体制を考えるためにアメリカ社会でのそれらについて見聞し、教師や保護者と意見交流しようとする。

### (2) 観察・研究の内容

A まず、実際の授業観察報告から始める。私が主に訪問したPender郡のTopsail Middle SchoolのESL (English as a second language) のクラスには二人の中国出身生徒がいるだけである。彼らは隣接するTopsail High Schoolの生徒である。その日の授業では、CAI (computer assisted instruction) が行われている。指導者はtutorであり、ESL教育資格を持った先生ではない。教材開発会社作成のCD-ROMを使用している。これは個別学習用であり、学習者の言語能力に合わせて、自動的に学習課題が対応していくように作られている。中国語でも会話内容を確認することができる。

場面設定された状況での会話を学習している。学習者が行う課題の一つは一つひとつのセリフを対話になるよう並べ変えるものである。会話の内容 (content) や文脈 (context) の理解を確認する課題である。ビデオゲームやインターネットが普及しているアメリカでは学習者にとって、コンピュータは興味のあるものでこの生徒も自主的に学習を進めている。

その後、各学校を巡回しているESL指導者に話を聞く。農場で働くメキシコからの移民の子どもが最近が増えている、年齢の低い生徒の方が早くしゃべれるようになる、まず、授業ではいろんな話題で話をさせる、間違いは最初あまり、訂正しないでたくさんしゃべることを指導する、そうすれば、まず、みんなとコミュニケーションがとれるようになる、情報の伝達を優先し、正しい表現を身に付けるために文法を後に教えていくとのことである。

オールタナティブスクール（低学力生徒・生活態度に問題がある生徒・ESL生徒が学ぶ特別な学校）ではスペイン語を学習している生徒とESLの生徒が同じ教室でそれぞれの学習言語を学ぶ授業を行っている。生徒同士が教えあいができることがよい点である。生徒数は11名。指導者は英語とスペイン語を話す。

この地域ではWillston Middle SchoolにESLの生徒が通学している。ESLは学年別ではなく6・7・8学年共通である。生徒の出身国はメキシコ、エルサルバドル、セネガル、パキスタン、フランス、ブラジルなどで生徒数は10名程度である。先生は少しゆっくりではあるがごく普通に英語で指導しているので、聞き取る力は身に付いていると考えられる。

マルコポーロの「東方見聞録」をテーマにした文章を教科書（Scott Foresman ESL5）を使って、学習している。学習課題は①フピライ＝ハンのお正月での宴の様子が書かれているので、それぞれに出身国では「お正月に何をするか」を英文で書く。単語が分からない時には辞書（英語－スペイン語）を使わせたり、絵を描くことも勧める。母国の文化を意識させる活動も行う。②教科書の文章に関する質問（板書されている）をみんなで読み、何を聞き取ればいいのかキーワードに下線を引く。③先生がほんの少しゆっくりと一回読むのを聞いて、質問に答える。④自分の書いた答を教科書で一人ひとりが確認する。⑤終われば、インターネットでフピライ＝ハンに関するサイトを自由に読む生徒がいる。

この授業の先生の話では Anna Uhl Chamot の learning strategy（学習方略理論）に基づいて授業を行い、文法よりもコミュニケーションを優先している。教室には受動態（受け身）の基本表現に関するポスターが貼られている、その他には文法に関するものはなく、置かれている教科書もそれに関するものはない。ESLの先生はそれぞれの生徒の保護者との連絡も仕事となっており、定期的に電話連絡を取る。母語の保持のために家庭では母語を話すこと、母国に関する本やビデオを見せることを保護者に勧めている。この訪問期間に実際に会った日本人家庭の子どもは自由に日本語を使えない。母語の保持も重要な課題となっている。

New Hanover High SchoolのESLの授業を少し観察

する。生徒数は17名。アジア出身者（香港、中国、韓国）も半数近くいる。教科書はVery Easy True Stories: Longman を使っている。コミュニケーションを重んじ、間違いはあまり直さない。読み物を読む中で文法を教える。ビデオ教材、アメリカの政治・社会の仕組みを扱った教科書やワークブックも使用する。英語を十分に話せない生徒に対するイジメはなく、アメリカ人生徒は外国語を話す生徒に好意的な関心を持ち、「母国語では何と言うの?」と聞いて、ESLの生徒の母国語や文化を尊重する。

帰国後、学習方略理論を授業に活かそうと「ESL授業における学習方略 Anna Uhl Chamot」を読む。学習者を自分に適した効果的学習方法を主体的に探し出す存在としてとらえようとする考えから、この研究が盛んに行われている。学習方略とは学習者がさらに効果的に学習をするために用いる手順や技術であり、これらを用いることで学習者は自信を得て、主体的に学習することができる。

この理論を部分的に参考にし、実際に学習活動を行い、研究実践する。

#### 読解における方略指導とそれらの活用状況と有効性についての調査

学習者は既に一年間の英語学習を行い、意識的、また無意識に個々に独自の読解方法を形成している。そこで、学習者が読解における方略を理解し、意識的に用いることで今までの読解方法を省み、より効果的・主体的・能動的な読み手に成長すること、指導者は学習者の方略活用状況と有効性を調査することを目標とする。

中学2年を対象に3時間の授業で実施し、教科書の文章を読解させる。新出の言語形式（文法）と単語は読解を始める前に学習者は一斉授業形式で学習する。これらについては理解がないと全く違った、間違った読解を行う可能性が高く、中学校段階では適切な時期での言語の基本（言語形式・語句）指導が重要であると考えられる。

まず最初に指導者が5つの読解方略を提示し活用方法を説明する。学習者はそれらを理解し、実際に例文

をもとに方略活用を練習する。

- \* 読解方略 ア 主部・述部を見分ける
- イ 意味のかたまりをつかむ
- ウ 分からない語句は文の前後関係から意味内容を推定する
- エ 既に知っている知識・情報を利用する
- オ 文は前から後の順に内容を読み取る（もどり読みをしない）

（学習者は中学2年生であるため、活用する方略を基本的なもの5つにしぼる。）

毎時間最初の一定時間内、他の学習者と情報交換せず、個別に読解活動を進め、方略を意識し読解するように指示する。どうしても分からない語句は辞書を用い、自主的に読解すること、指導者に質問することを勧める。また、通常は読む活動の前に文章に関するいくらかの情報を与え、学習者のスキーマ（認知的知識構造）を活性化させる過程を経るが、読解方略を用い、個別に読解を行うためこの過程を省いている。

\* 学習者が有効的に活用した読解方略

どの方略が有効であったかの調査結果

（基数 学習者118名×3時間＝354名）

読解方略	ア 主部・述部を見分ける	83名
	イ 意味のかたまりをつかむ	96名
	ウ 分からない語句は文の前後関係から意味内容を推定する	108名
	エ 既に知っている知識・情報を利用する	108名
	オ 文は前から後の順に内容を読み取る（もどり読みをしない）	96名

実施前、オの読解方略については活用状況が他のものと比べ、低いと予想した。それは内容を読み取る時、日本語の語順に並びかえて理解する方法が定着している学習者はかなり多いと予想したからである。しかし、この方法は速読やリスニングでは機能しないことを説明したためか、意識して前から後の順に文の内容を読み取る努力をする学習者が多かった。そして、他の読

解方略と同程度に有効性があると回答している。

基数をもとにそれぞれの数値を見てみると多くの学習者が3時間全体に渡って、読解方略を有効に活用したとは言えない状況である。

他には下記にあるような方法が有効であると考えられる学習者がいる。

- \* だれが何をどうしたかを読み取る
- \* 発音の分からない語句はローマ字読みする
- \* まず全体を読み、大まかに内容をつかむ
- \* 登場人物の感情を考える

少数ではあるが「一つ一つの単語の意味を訳して、日本語順に並びかえて内容理解する・直訳する・文の後ろから訳す」などの方法が有効であると回答する学習者がいる。

B \* 学校教育の使命と教育改革

多民族国家アメリカではすべての公立学校の人種別生徒数に極端な片寄りがないよう、busing（人種差別撤廃のためのバス通学輸送）を行い、複数人種による共学を法律で定めている。

ここノースキャロライナでは一人ひとりの生徒を社会において有益に、創造的に、自活し生きる人間、そして他を思いやる人間に育成するため、読み・書き・算数の基礎学力教育、理科・社会・体育・音楽・美術・技術家庭・外国語教育、コンピュートースキル教育、キャラクター教育（人格教育、日本の道徳にあたる）を行うことを小学校、中学校の教育目標としている。

現在、生徒の基礎学力向上・望ましい人格育成にむけて、州教育機関が陣頭指揮をとり、教育改革を実施している。この改革を推進するにあたり、政界・経済界・一般市民に広く意見を求めている。郡教育委員会単位でのカリキュラム開発、大学での教授法に関する教員研修、校内研修、教職員の報酬改善、地域社会や過程との連携強化、進級テスト（gateway）導入、生徒指導ガイドラインの作成、低学力生・生活での問題を抱える生徒への学力保障（alternative schoolの設置）と抜本的な改革が進められており、生徒・教職員・教育委員会関係者すべてがより良い成果を挙げることの責任を負っている。

教育改革の一環として新しい学校教育を研究・実験

する。訪問した博物館付属の非営利チャータースクール（中学校）の取り組みを紹介する。

学校の目標は新しい教育を研究・実験する・他の学校の先生に広め、成果を共有するである。大学の教育学部とは連携していない。

教育の特徴としては年度当初に一人ひとりの生徒が自分に関する10の課題、社会や世界に関する10の課題を設定し、一年間にそれらの学習課題に取り組む。常に学習成果を自己評価し、学期ごとの懇談では生徒自身が保護者や先生に自分の学習過程をまとめたポートフォリオを用い、学習成果を発表する。

この学校のホールマーク（優れた特徴）は以下の内容である。

- ・協力的な関係—小さな学校環境、学習者コミュニティ
- ・お互いを尊重する環境
- ・すべてにおいて高い期待—学究的な厳しさ、ふさわしい態度
- ・若者中心
- ・自発的な学習
- ・統合された・主題のある学習方法
- ・活動・経験に基づく学習—プロジェクト、本物・

現実の生活を経験、探求と発見

- ・グローバルな視点
- ・「博物館」学校—イクスプロリス（博物館名）の資料・展示物開発過程の利用

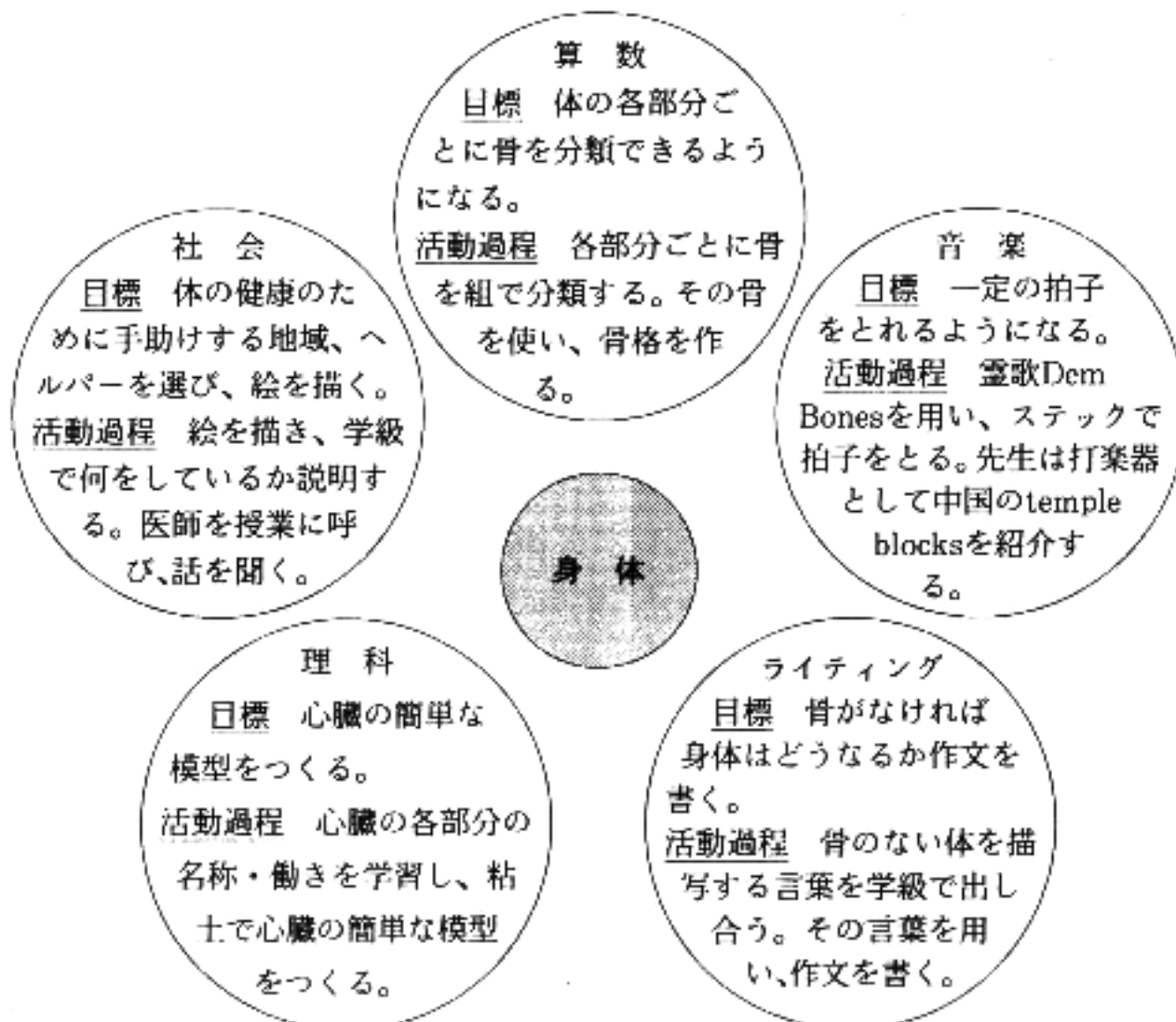
\*学校運営教職員研修

学校教育校長、2～3人の副校長、教員、職員、カウンセラー、ソーシャルワーカー、ボランティア、警官などで運営される。学校全体、学年単位で教職員はチームを作り、授業や生徒指導について協力関係を築きつつある。基本的に先生は長年に渡って、同一学年を担当し、その学年の授業の専門家になることが望まれる。

現在、先生の授業レベルを高めるために校内研修は盛んに行われている。以下に研修内容を示す。

小中学校合同による、integrated study（総合学習）を進めるためのカリキュラム研究と実践発表会である。アメリカの学校では同一学年の複数の教科担当が共通の学習テーマを設定し、それぞれの教科がそのテーマをいかにとらえ、どのように生徒に学習させるかを話し、総合学習カリキュラムを作成する。

小学校中学年の総合学習カリキュラム例（研修資料より）



#### \*学校教育活動の実際

学校は生徒がそれぞれに目標を設定し、達成することを促す。そのためにまず学校は期待する生徒像をポスターなどを使い、提示している。例としてはintegrity (誠実、高潔)、responsibility (責任感)、independency (自主性)、Respect others. (他人を尊重する)、Understand the Similarities and Celebrate the Differences. (相似点を理解し、相違点を讃えよう)、Attitude is a little thing that makes a BIG difference! (ちょっとした心構えで大きな違いが生まれる)、You never know what you can do until you try. (挑戦しないと何ができるのか分からない。) などがある。同様に教職員も生徒への良き模範となることが求められる。

授業においては教材準備を整え、一時間ごとの指導目標を達成すること、常に落ち着いた、そして相互作用 (interactive) の学習環境を維持することが求められている。生徒は学習の指示をていねいなほどに細かく与えられ、まず個人で静かに教科書を読み取ることやワークシートの問題を解く学習をする、コミュニケーション (国語) では活発に意見を発表する、グループ学習では意見を出しあい共同学習で課題を解決していくなど、徹底して学習目標を実現することの指導を行う。必要であれば図書館の書物、インターネットの利用、チームティーチングの実施も行う。

生徒のやる気を引き出すために学習内容を関心の持てるものにするだけでなく、良い学習成果をあげた生徒へのインセンティブ (報奨物) が与えられる。例としてはキャンディ、テストへの加点、ご褒美の遠足、廊下の掲示板に学業成果を認める表彰を行うなどである。反対に授業での学習態度に問題がある生徒を放置しないで、改善するためにいろんな対策を講じる。生徒指導については生徒の行動規範 (学校独自のものではなく郡単位で定められている) に基づき、すべての先生が足並みを揃えた指導を行う。校長・副校長・カウンセラーによる指導、放課後の留め置き・校内特別停学授業の実践と手当も厚く、生徒自身にも責任を取ることが強く求める。授業でのガムやあめを食べることが有効に働くと考え (生徒が落ち着く)、容認する先生がいる。

生徒に基礎学力を身に付けさせることが先生の仕事であり、生徒が生活に目標を持ち、学習に専念できるよう指導するのが校長・副校長・カウンセラーの役割

である。彼らと生徒一人ひとりの距離は一般教員と生徒間のそれとまったく同じであり、常に生徒とともに学校生活を送り、彼らのことを考えている。

私の訪問した中学校の校長は両親を事故でなくした生徒の養育者を見つけ、マッチングする、放課後その生徒に個別授業をする、また、母親の男友達から性的虐待を受け、数日入院していた生徒を校長室で休ませ、カウンセリングを行うなどの仕事を精力的に進めていた。また、校長・副校長も大学で学校運営に関する研修を受ける、すべての教員の授業を年三回観察し教育委員会への報告書 (教員がこの報告書を事前に閲覧し、サインをすることになっている) を作成する、より良い教職員を雇用する人事を担当するなど学校全体の教育力向上のため明確な学校運営方針をもち、リーダーシップを発揮する責任を負っている。

ある母親は学校に要求する教育として、大学に進学できる学力を身に付けさせること、クラブ活動などの課外活動でより良い人間関係を築かせることを挙げている。人間関係を学ぶということでは特別に研修を受けたピースメーカーと呼ばれる生徒を学年に10人任命し、生徒間の問題解決を担当させる制度がある。ピースメーカーになろうとする生徒は自薦し、オーディションと研修を受ける。話合いで問題解決を図るロールプレイング練習と野外ではお互いの信頼を高める訓練等を行う。

人格教育では良い人格を備えた人間の性質について生徒に考えさせたり、以下のような会話をもとに生徒に意見発表を行わせる。

ジム： トニーはいつ新しいコンピューターを買ったんだい。

スーザン： 知らないわ。でもカッコいいし、性能がとてつよいのよ。

クレオ： そうだね、カーバー中学校から盗まれたのによく似てるなあ。

ジム： おい、トニーは僕の友達だ。他の学校に盗みに入ったと言うのか。

クレオ： だれも責めてはいないよ。自由社会では好きなことを言う権利があるんだ。トニーが気に入らないなら、どこで買ったか証明すればいいんだ。



スーザン： ピーソン先生から借りてるかも。家の人が成績が上がるように買ったのかも。ジム、聞いてみたら。

ジム： みんな、ぼくにトニーを責めさせようとしてるんだね。ぼくには関係ないよ。

課題 この会話を分析する。どの人物が公平か、的確か、勇気があるか、親切か、正直か、我慢強いかを考える。それぞれの人物が何をすべきか考える。

(人格教育のワークシートより抜粋)

他の州ではモラルや徳目といった精神面に重きを置く人格教育に加えて、主にライフスキル習得をめざす「ソーシャルディベロップメント」と呼ばれる、より実践的で技術的な道徳教育プログラムを開発し実施する。感情表現・自己統制・問題解決・意思決定・コミュニケーションなど、子どもたちが社会を生きるために必要とする知識や技術といったライフスキルを学習する。このプログラムには麻薬防止・エイズ・退学防止・異文化理解に関する教育も含まれる。

カウンセラーは各学校に複数配置されている。個々の生徒の生活指導の他に、問題を抱える生徒への理解と協力を求めるために他の生徒にも話をする。さまざまな問題や悩みを抱える生徒の話をじっくり聞き、自主的に問題解決し、生活を改善するための適切なアドバイスをする。学校教育においてとても重要な役割を担い、他の教職員と常に情報交換を行い、生徒指導方針を立てる。

#### \*家庭教育の実状

子どものしつけは家庭の責任であると保護者は認識している。そのため、良いこと・悪いことを小さいときから理解させる。5・6才になると子ども自身になぜ、その行動が問題になるのかを考えさせる。自分自身で考え、意見を言うことを常に求める。子どもが問題行動を繰り返し続けると罰をあたえ、責任を取らせる。例えば、テレビを見させない、外出させない、高校生では車のカギを取り上げるなどである。年齢に応じて、家庭でお手伝いをさせ、家庭での子どもの役割を意識させることに努める。子どもは学校からたくさんの宿題が出て、家庭学習をするのでそのために保護

者が子どもの勉強を見る。

アメリカ社会でも年々、家庭教育力の低下が問題となっており、学校カウンセラー・ソーシャルワーカーとの連携、子どものしつけに関する公的支援の充実を図り、子育てに悩む保護者を支援する体制が整っている。

#### \*学校教育への支援

保護者や地域住民の学校教育への支援はかなり多く見られる。それらのすべてはボランティア活動である。スクールバスの運転、事務関係(訪問者や電話の対応)、学校図書館司書の手助け、校外にて学習するときの生徒引率、飲食を伴う学校行事での食事の準備などがある。彼らは子どものために多様な教育支援活動を行い、学校の要請に応じている。学校はそういう意味においても保護者・地域社会にオープンな存在となっている。博物館で行われていた小学生低学年の授業に引率担当で来ていたある保護者は「私たちの力は必要とされている。また、このように参加することで学校の授業の様子や活動内容が理解できてプラスである。」と言っていた。

### (3) 結果と考察

#### A \*ESLの授業観察について

ESLの授業では生徒数は20名を越えることはない。家庭的な雰囲気があり、どの生徒にも明るい表情が見られる。そして、一人ひとりに適切な指導がなされている。生徒は授業の中で英語で学習内容を発表する、意見を述べる機会が多く与えられる。言語学習には言語運用能力が十分に伸ばされる学習環境が不可欠であり、日本の外国語教育もこの部分の改善を図る必要がある。

日本の英語教育では適切に文法指導を行い、文の仕組みを学習することと英語を使う必然性と伝え合う意味内容に必要性が生まれる実際のコミュニケーション活動を保証し、両方をうまく組み合わせることが重要である。

#### \*読解における方略指導とそれらの活用状況と有効性についての調査について

今回、指導した5つの読解方略は中学2年生が英文を読み、内容を理解する上で有効となるであろう方略

を示したものである。学習者はそれぞれの方略の有効性を認めてはいるが、常にそれらを意識し、活用し読解活動をするためにていねいな指導の手順を踏み、学習者相互で活用状況を交流させる必要がある。また、「単語の意味を日本語で理解し、それらを日本語の語順に並べ変え文を理解する」方法をとる学習者への指導を考える。

さらに今後、文内容を理解するだけでなく、その内容に関して自分自身の考え・意見を形成させながら、読みを進めるインタラクティブな読解を行うための方略指導を取り入れることも必要となっている。

#### B \*学校教育の使命と教育改革について

社会において有益に創造的に自活し生きる、そして他を思いやる人間に成長する上で必要となる教育を保証するために教育内容の見直しを図ると同時に、教育内容・システムの改革が徹底している。また、関係者すべてが明確な責任を負っている。

日本の学校教育に求められるものは個々の生徒の現状をとらえ、その生徒の個性・自己教育力を十分に伸ばさせるきめこまやかな人的支援体制を確立することである。そのための適切な学習環境も重要である。

#### \*学校運営について

学校長は明確に学校運営方針を打ち出し、特に学校内において良きリーダーシップを発揮する存在でなければならない。個々の学級の問題を公にし、複数の教職員が協力し解決する、学校教育活動を家庭・地域社会にさらに公開し、理解と支援を求め協力体制を充足

することが必要である。

#### \*学校教育活動の実際について

日本の学校は集団生活上のきまりが形式を整えるために必要なのか、実際に教育活動を円滑に行うために必要なのかを生徒と教職員が一緒になって見直す必要がある。概して、生徒に認めるべき権利を認めないし、一方、きまりを無視する生徒に対しても負うべき責任を追及しないあいまいさがある。また、生徒間の問題を解決するために生徒自身がピースメーカーとなるピア（仲間）サポート体制がいじめ・ケンカを解決する上で有効に機能するのではと考える。

#### (4) おわりに

私自身、アメリカの学校教育・教育改革を見聞し、日本のそれらについての考える新しい「視点」を持つことができた。今後も幅広く、多彩な実践から学ぶ姿勢を持ち続けたい。

Topsail Middle School とは生徒間・先生間で電子メールによる交流を続けており、互いに学び合うことのすばらしさを実感している。

#### 参考文献

中学校学習指導要領（平成10年12月） 解説－外国語編－

Learning Strategy Instruction in the English Classroom Anna Uhl Chamot

学校で殺される子供たち アメリカの教育改革レポート 田中克佳

## グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト 米国現地研修ジャーナル（2000年3月26日－4月6日）

大阪府立枚方津田高等学校 教諭 金澤賢司

### 3月26日（日）

終日自由行動だったのでウィルミントン市内を散策。日中はほとんど人通りがない。市内には教会が多くありほとんどの市民は教会にいらっている。（宗教の生活に与える影響を考えさせられる）

### 3月27日（月）

Hoggard High Schoolを訪問。終日、学校設備、授業等を見学。校内放送のテレビ番組に出演。スタジオと機材、生徒の能力に驚く。生徒の多さに圧倒される。学校の広さ、設備の充実度、多彩な授業に驚かされる。

### 3月28日（火）

Laney High Schoolを訪問。校長と懇談。学校設備、授業等を見学。生徒にインタビュー。生徒は優等生でインタビューの答えも優等生。ただ、ドラゴンボールZが好きだということには驚いた。マイケルジョーダンの出身校ということ。Hoggard High Schoolよりも小規模であった。

### 3月29日（水）

Hoggard High Schoolを訪問。終日、学校設備、授業等を見学。生徒、教師にインタビュー。インタビューに答えてくれた生徒はLaney High Schoolと違い一般的な生徒。本音が聞けた。教師も素直にインタビューに答えてくれた。

### 3月30日（木）

Hoggard High Schoolを訪問。終日、学校設備、授業等を見学。夜、レセプションに参加。建物の優雅さに圧倒される。

### 3月31日（金）

中学校、小学校、高校を訪問。小学校のしつけの厳しさに驚く。夜、ピッグピッキングに招待される。パーティを始める前に主催者のスピーチ、そしてお祈りがある。そういえば、国語の授業にスピーチがあった。アメリカで人の前でしゃべることを授業で教えている意味が何となく分かったような気がする。夕日をあびながら広い庭でお祈りをする光景は「大草原の小さな家」をほうふつとさせる。

### 4月1日（土）

ホームステイ、ホストファミリーと過ごす。灯台、入植地跡、海岸、棧橋等を見に行く。夜は在米の商社勤務の日本人と夕食。NCAAのバスケットボールの試合をテレビ観戦。いくら地元の大学が出ているとはいえよくあそこまではしゃげるなど感心する。

### 4月2日（日）

ローリーへ移動（車で）。アメリカは広い。

### 4月3日（月）

Exploris Middle Schoolを訪問。学校の設立の経緯、教育目標等を聞く。学校設備、授業等を見学。日本ではないタイプの学校である。

教育委員会訪問。ノースカロライナ州の教育システムについてのレクチャーを受ける。

### 4月4日（火）

サマリーミーティング。今回のプロジェクトで得たものをグループごとに発表。アメリカの教員と質疑応答を通して意見の交換。Exploris Middle Schoolの生徒がパワーポインターを使って自分たちが調査したものを報告。日本ではあまり見られない光景。驚かされる。

# 日米間の生徒指導体制の相違点と授業でのコンピューター活用の実体

大阪府立枚方津田高等学校 教諭 金澤賢司

## (1) はじめに

現在、私は理科(生物)・情報処理Ⅰを担当しており校務分掌は生徒指導部、クラブは男子バスケットボール部を受け持っています。日本の現状と問題点から下記の2点に絞って視察研究を行いました。

### <生徒指導にかんして>

昔のような校内暴力は徐々に減少傾向にありますが、人の話を聞こうとしない生徒、自分で行動しようとする指示待ちの生徒、何事にも興味を示そうとしない生徒が増加傾向にあります。このような生徒は、学級崩壊、不登校という形で表面化しますが、たいていの場合は表面上何もなかったかのように社会へ出ていきます。生徒の内面的変化は年々ちがった形で進行していきそれを理解するのがたいへん困難です。(教師側の年齢および思考回路の形骸化にも問題があると思います)

また、問題事象としては薬物を使用する生徒、暴力団とのかかわりを持つ生徒、情緒不安定による暴力事件を起こす生徒、売春類似行為を行う女生徒(後ろめたさをもたない)の増加があげられます。これらの問題は学校だけの問題ではなく家庭や地域社会とも大きな関係を持っています。アメリカでは家庭、地域社会とどのようなプログラムで問題解決に当たっているのか学びたいと思っています。

### <情報処理授業にかんして>

急速にコンピューターが普及し1家に1台の時代になってきました。10年前はコンピューターに親しもう、

コンピューターを使えばこんな事ができるということが学習の内容でした。しかし、現在ではこのようなことはできて当たり前、もうしているという状態です。では教育現場では何を学習させていけばよいのだろう、生徒にどのように興味(趣味としてではなく)を持たせればよいのだろう、教育目標を具体的にどのように設定すればよいのだろう、という問題が発生してきます。私自身、情報処理=コンピューターという考えには否定的です。コンピューターという機械の上手な活用法=情報処理ではないと思うようになってきました。情報化が進んでいるアメリカでは情報処理のような授業の教育目標をどの点に設定しているのかを学びたいと思っています。

以上のような課題を持って今回のプロジェクトに参加してもらいました。まず、教育現場で実際に見て、聞いて情報を収集することを第1にしました。

## (2) 研究の概要

- ①事前研究ではアメリカの教育制度の基本とノースカロライナ州の文化、風土の概要を知ることにつとめました。
- ②現地では生徒指導担当者、コンピューターを授業に利用している教員に積極的にアプローチし情報を得ることにつとめました。
- ③できるだけ生徒の生の声を聞くようにし教師サイドからものを見るのではなく生徒サイドからものが見られる様にしました。

④現地調査の日程

日 時	場 所	内 容
3 / 26 (日)	Wilmington	終日自由行動
3 / 27 (月)	Hoggard High School	学校設備、授業等を見学
3 / 28 (火)	Laney High School	校長と懇談。学校設備、授業等を見学 生徒へのインタビュー
3 / 29 (水)	Hoggard High School	学校設備、授業等を見学 生徒、教師へのインタビュー
3 / 30 (木)	Hoggard High School	学校設備、授業等を見学 職員会議へ参加 夜、レセプション
3 / 31 (金)	?? Middle School ?? Erementary School New Hanover High School	校長と懇談 学校設備、授業等を見学 夜、現地教員家族とビッグピッキング
4 / 1 (土)	Host Family	ホームステイ
4 / 2 (日)	Host Family	移動日
4 / 3 (月)	Exploris Middle School NCDPI	学校の設立経緯、教育目標等を聞く。 学校設備、授業等を見学 ノースカロライナ州の教育システムについてのレクチャーを受ける。
4 / 4 (火)	Exploris Middle School	学校設備、授業等を見学 付属の博物館を見学 サマリーミーティング 今回のプロジェクトで得たものをグループごとに発表。アメリカの教員と質疑応答を通して意見の交換
4 / 5 (水)		帰国

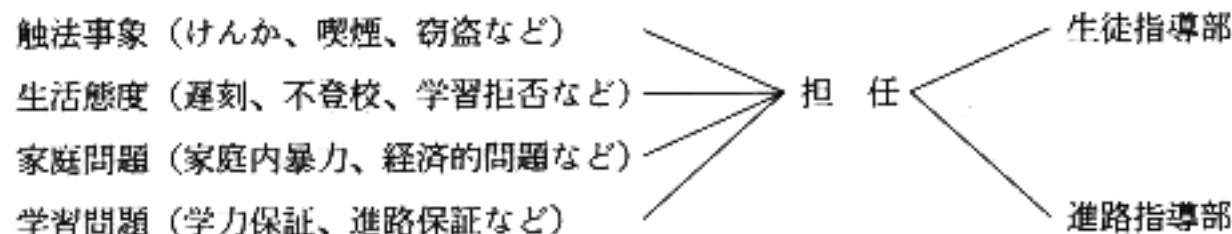
(3) 研究の結果と考察

<生徒指導に関して>

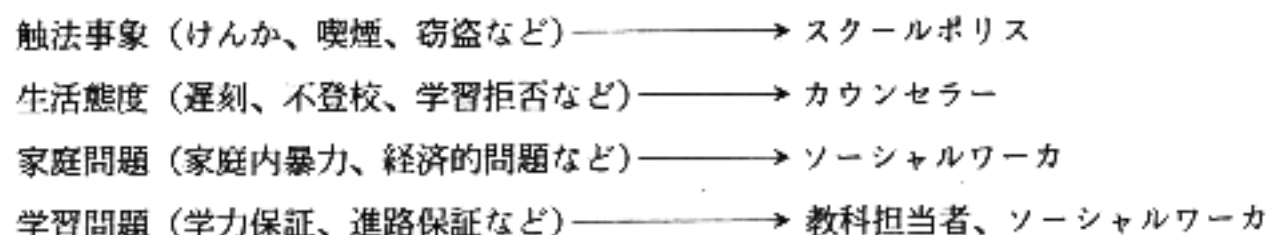
アメリカでは徹底的な分業化が進んでいるのに驚かされました。スクールポリス、カウンセラー、ソーシャ

ルワーカーがおかれ、問題事象に対して専門家が対処する制度はうらやましいものです。日本ではすべての事象の窓口が担任です。図で示すと下記ようになります。

[日 本]



[アメリカ]



日本では専門職ではなく教員がすべてのことをしなければならぬので全ての事象において満足のいく結果を得られず教師はジレンマに陥っています。学校の生徒に関わる業務は教員が全て行わなければならない、教員は必ず授業を行わなければならない、という足かせをはずす時期にきているのではないかと思います。アメリカのように教員免許を持たなくても生徒と関わるカウンセラー、ソーシャルワーカーを学校に配置する、教員のうち何名かを、授業をせずに問題事象のみ担当するカウンセラーのような職に配置する、などの方策が必要ではないかと思います。

問題事象に対処する考え方の面では、アメリカでは行動の結果を明確に示し、自分たちの行動結果を受け入れさせるという考え方で行っています。日本では良い行動、悪い行動を明確にしているが、その行動をとった結果までは明確にされていないし、生徒に対して結果を受け入れることを強く要求していないとされます。生徒に対して結果を受け入れることを強く要求することは子供を罰するという意識があるようです。しかし、アメリカでは罰するという意識はなく、自分のとった行動の責任をとらせる（結果を明示して責任ある行動をとらせる）自己責任を明確にするという意識の方が強いように思われます。考え方の違いは国民性もあり一概にアメリカの方がよいとはいえませんが、私の見方ではアメリカの考えの方がはっきりする、納得ができると思います。

また、地域の住民が学校に要求するのは学力をつけさせることで、日本のようにしつけとか進路保証とか保育所の代わりまでを要求していません。学校本来の目的のみを要求しています。よって、学校の外で起こった事象に関しては警察を含め地域社会が責任を負っています。責任を負うことによって子供の教育にかかわっているという感じでした。日本でも地域が子供の教育に参加しようと行動を起こしていますが責任を負うまではいたっていないようです。（言葉は悪いですが、いっばなし、やりっ放しの感があります。）

#### <情報処理授業にかんして>

アメリカでは日本のような情報処理の授業はありませんでした。コンピュータの操作に関しては小学校、中学校もしくは家庭である程度マスターしており、授業の中では操作法にはあまりふれず活用法を中心に行っているように思われます。しかし、全ての子供が

コンピュータの操作法をマスターしているわけではなくデジタルディバイドが進んでいるようにも思われました。

活用法に関していえば職業教育に近いCAD、ネットワーク作成、フォト（画像処理）、ホームページビルド、ブロードキャストなどがあり驚かされました。専門科高校、普通科高校の区別がないアメリカでは可能でも、システムの違う日本では総合学科以外では不可能です。また、設備の充実度ではアメリカのほうがはるかに進んでいました。財源はほとんどが企業の寄付（現物支給）でまかなわれており日本との制度違いを痛感させられました。以上のことを考えるとアメリカの情報教育をすぐ日本で行うことは制度の変革なしでは無理だと思います。

しかし、情報というものの考え方、情報の利用方法等、コンピュータ中心の授業でなく情報中心の授業という考え方は大変重要だと思います。新教科「情報」でもこの考え方が前面に打ち出されていたと思います。今年の新教科「情報」免許取得講習会でもまずコンピュータありきという授業はだめであると指導を受けました。情報活用能力の取得という指導目標と指導方法は日本でも活かすことができると思います。

#### (4) 今後の展望

昨年のアメリカ教員の訪問を受けて、今年度はじめて日本側が訪問、2度目のアメリカ教員の受け入れとプロジェクトがようやく機能し始めた感があります。枚方津田高校でも昨年のアメリカ教員の訪問は意図がはっきりつかめず一過性の感がありましたが、私がこのプロジェクトで交換訪問をし、再度アメリカ教員を受け入れたことで継続性が見えてきました。学校の英語の授業でのE-mailの交換、PTA後援によるホームステイ支援等本校でも色々な動きがでてきています。できれば、姉妹校提携、交換留学生の受け入れ等も視野に入れてプロジェクトに参加していきたいと思っています。

#### (5) おわりに

今回のプロジェクトに参加して実際にアメリカの教育現場をみて思ったことは「百聞は一見に如かず」ということでした。また、国民性の違い、教育制度の違いという厚い壁も感じることができました。しかし、

日本の教育制度もアメリカに近づきつつあり変化していますし、また、アメリカも教育制度が変革しある意味で日本に近づきつつあります。両国はよりよい教育を目指して変化し続けています。国民性の違い、教育制度の違いで目標に向かって同じアプローチができる

とは思いますが最終目標は世界共通であろうと思います。教育現場にいるものとして、このプロジェクトを通してよりよい教育システムが構築できればと思います。